

女子プロ野球選手の職務満足感および目標志向性と競技特性不安の関係  
Job satisfaction and goal orientations as predictors of trait anxiety in Japanese female  
professional baseball

早乙女誉<sup>1</sup>、山田陽介<sup>2</sup>、森原徹<sup>3</sup>

要 旨

本研究の目的は、女子プロ野球選手を対象に、職務満足感と目標志向性、競技特性不安の関連性を検討することであった。

2013年の2月と3月に57名の女子プロ野球選手に対して質問紙調査を実施した。質問項目は、1) 職務満足感、2) 競技特性不安、3) 目標志向性、4) 選手の競技特性に関する情報（例えば、年齢、競技年数、ポジションなど）であった。職務満足感と目標志向性、年齢、競技年数を独立変数、競技特性不安とその下位尺度を従属変数とした重回帰分析によって、職務満足感と目標志向性、競技特性不安の関連性について検討した。

重回帰分析の結果、職務満足感と競技特性不安の間には有意な関連性は認められなかったが、自我志向性と競技年数が競技特性不安に対して有意な説明力を有していることが確認された。

これらの結果から、女子プロ野球選手の場合は全体的な職務満足感が高まったとしても、競技パフォーマンスに悪影響を及ぼす競技特性不安の抑制にはつながらないが、選手の自我志向性を低下させることで競技特性不安を抑えることができると考えられる。

**Key words:** 職場環境、競技不安、達成目標、女子プロ野球

<sup>1</sup> 阪南大学流通学部、<sup>2</sup> 独立行政法人 国立健康・栄養研究所、<sup>3</sup> 京都府立医科大学大学院医学研究科

〒580-8502 大阪府松原市天美東 5-4-33

TEL 072-332-1224

FAX 072-336-2633

E-mail saotome@hannan-u.ac.jp

受付日：2014年9月1日

受理日：2015年3月25日

## I. 緒 言

2005年に四国アイランドリーグ（現四国アイランドリーグ plus）が発足したのを皮切りに10チーム以上の独立リーグ球団が誕生し、2013年シーズンでは約300名の選手が独立リーグ球団に所属している。このように、職業として野球をする機会が増えたものの、石原<sup>1)</sup>が独立リーグについて「これまで4リーグが立ち上げられたものの、いずれのリーグ、チームとも黒字を達成したことがなく、数球団はその存続の危機にさらされている。」と指摘するように各リーグおよび球団の経営状況は厳しく、選手は不安定な状況の中で職業としての野球を続けていることは想像に難くない。

産業・組織心理学の領域では、職場の外的環境、就業条件、職場内対人関係等によって構成される職務満足感が、ストレス反応<sup>2)</sup>や不安感と生活満足度<sup>3)</sup>に影響を与える可能性が示唆されている。我が国の製造業の従業員を対象にした研究<sup>4)</sup>では、職務満足感の複数の側面以外にも職業全体に対する満足感に着目し、「個々の職場環境に対する満足感が全体的職務満足感に影響を与え、さらにそれが、精神健康状態として示される心理的ストレス反応を導くと考えられた」と報告している。このような知見を鑑みると、仕事としてスポーツに関わるプロ選手においても、不安定な職場環境や就業条件による全体的職務満足感の低下が、ストレス反応を引き起こし競技パフォーマンスに悪影響を及ぼすことが予想される。

スポーツ場面では、ストレス反応の一種である不安<sup>5)</sup>が競技パフォーマンスに影響することに着目し、不安に関する研究が進められている。この選手が抱く不安については、Spielbergerの状態-特性不安理論<sup>6)</sup>やMartens<sup>7) 8)</sup>の研究を参考にし、「競技不安」という概念を中核に位置付けて、尺度の開発<sup>9)</sup>や実力発揮度との関係<sup>10)</sup>について検討されてきた。競技不安は、「スポーツ競技における不安感や緊張感を伴った心理的・身体的反応、およびその特性<sup>11)</sup>」と定義され、競技特性不安と競技状態不安の2つに分類されている。前者の競技

特性不安は、比較的安定したパーソナリティ特性としての不安であり、後者の競技状態不安は、一時的な感情状態としての不安である<sup>12)</sup>。一般に、競技特性不安が高い選手は、試合のような緊張する状況では高い競技状態不安を示す傾向があり、競技特性不安が競技状態不安を規定することが報告されている<sup>13)</sup>。この競技不安が選手の競技パフォーマンスに悪影響を及ぼすことから、競技不安を軽減することを目的としたカウンセリング<sup>14)</sup>や漸進的弛緩法と自律訓練法<sup>15)</sup>、コーチ教育プログラム<sup>16)</sup>の有用性が検証されている。

このような競技不安に関する研究が注目を集め始めた1990年代に徳永<sup>12)</sup>は「不安が何に起因しているかが分析できなければ、スポーツ選手の不安軽減のための指導ができない」と述べ、選手が抱く不安に影響を及ぼす要因を明らかにすることが競技不安の研究における大きな課題であると指摘している。しかしながら、選手の年齢や所属カテゴリ（例えば、プロチームや実業団、部活動など）によって、不安を引き起こす要因は異なるため、多くの選手に共通する不安の先行要因を検討する一方で、選手が置かれている状況固有の要因についても明らかにしていく必要があると考えられる。

そこで本研究では、職業としてスポーツを続けるプロ選手に着目し、先述した産業・組織心理学の領域における職務満足感とストレス反応<sup>2)</sup>や不安感と生活満足度<sup>3)</sup>との関連性を踏まえて、職務満足感と競技特性不安の関連性を明らかにすることを目的とした。職務満足感が競技特性不安と関連する可能性が示されれば、カウンセラーやメンタルトレーナー、コーチといった競技サイドだけではなく、チームの経営サイドからも選手の競技特性不安を軽減させる方策を検討する意義が高まるだろう。特に、本研究ではこの経営サイドが選手に影響を与える可能性に焦点を当て、競技サイドからのアプローチと比較して、その有効性の検討を試みた。具体的な方法としては、コーチが選手の競技特性不安を抑制するうえで重要視されている<sup>16)・18)</sup>目標志向性（選手が達成しようとする目標の傾向）<sup>19)</sup>註1を分析に加えて、競技特性不安に対

する職務満足感と目標志向性の説明力を比較した。なお、本研究では日本女子プロ野球リーグに所属する選手を調査対象とし、新興のプロスポーツリーグに所属する選手の職務満足に関する基礎資料を収集することを副次的な目的とした。日本女子プロ野球リーグは、2010年に2チームで発足し、2012年3チーム、2013年4チームと徐々にチーム数は増えている<sup>20)・23)</sup>。しかしながら、それに伴って年間スケジュールも改編を繰り返し、未だシーズンを通してのリーグ戦やトーナメント戦の大会方式は定着していない。加えて、他の独立リーグと比較して1シーズンに開催される試合数や登録選手数が少ないことから、所属選手は非常に不安定な状況の中で職業としての野球を続けていることが予想される。このような選手たちの職務満足に関する基礎資料は、我が国のエリート競技者の活躍の場であるプロスポーツチームにおける職場環境や就業条件を整備するうえで有益な情報となるだろう。

## II. 方法

### 1. 対象者とデータ収集

本研究は、日本女子プロ野球リーグに所属する全選手(57名)を対象とした、質問紙調査による横断的研究である。調査は、2013年の2月および3月に実施した。質問紙は、病院内で実施されたメディカルチェックの問診票と共に配布し、その場で回収した。なお、倫理的配慮として、事前に質問紙への回答は任意であり、調査に協力しなくても何の不利益ももたらされないことや個人情報の保護に関する事項を説明した。

### 2. 測定項目

#### A. 職務満足感

職務満足感は、田中<sup>4)</sup>によって作成された全体的職務満足感尺度4項目(“現在の職場に満足している”, “現在の仕事内容に満足している”, “全体的にみて今の仕事には満足している”, “もし自分の思いどおりになるならば5年後も今の職場で働い

ていたい”)を用いて測定した。回答は「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5段階評定で求めた。なお、尺度の内的整合性は、先行研究<sup>4)</sup>において十分な値( $\alpha=.88$ )が示されている。

#### B. 競技特性不安

競技特性不安は、橋本他<sup>11)</sup>が作成した尺度(25項目)を用いて測定した。この尺度は、対象者が認知している競技特性不安の程度を測定する尺度であり、5つの因子によって構成されている。第1因子が「精神的動揺(“冷静な判断ができなくなる”など5項目)」、続く第2因子は「勝敗の認知的不安(“負けた時のことが気になる”など5項目)」、第3因子が「身体的不安(“顔がこわばってくる”など5項目)」、第4因子が「競技回避傾向(“精神的に苦痛を感じてくる”など5項目)」、最後の第5因子は「自信喪失(“監督や仲間をがっかりさせるのではないかと不安になる”など5項目)」であった。対象者にはこれらの項目に「あなたは試合前になると一般的にどのような傾向がみられますか」という質問文で尋ね「めったにない(1点)」、「ときどきある(2点)」、「しばしばある(3点)」、「いつももある(4点)」の4段階評定で回答を求めた。なお、競技特性不安尺度を作成した先行研究<sup>11)</sup>では、各因子の合計得点と因子を構成する項目の得点との相関係数を算出し、すべての因子が十分な内的整合性(競技特性不安: $r=.46\sim.74$ , 精神的動揺: $r=.56\sim.61$ , 勝敗の認知的不安: $r=.46\sim.65$ , 身体的不安: $r=.57\sim.60$ , 競技回避傾向: $r=.52\sim.63$ , 自信喪失: $r=.63\sim.74$ )を有していることを報告している。

#### C. 目標志向性

目標志向性は、伊藤<sup>24)</sup>が作成した尺度(18項目)を用いて測定した。この尺度は、課題志向性と自我志向性の2つの因子によって構成されている。対象者には、「スポーツのどのような場面で楽しさや喜びを感じるか」という質問文でたずねた。課題志向性は「どうしたらうまくできるのかをいろ

いる工夫しているとき」や「新しい運動（プレー）を練習しているとき」などの7項目、自我志向性は「他の人よりも上手なとき」や「試合で目立ったとき」などの11項目であった。回答は「全くそう思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」までの5段階評定で求めた。なお、尺度の内的整合性は、先行研究<sup>20)</sup>において十分な値( $\alpha = .90 \sim .85$ )が示されている。

D. 対象者の競技特性

対象者の特徴を把握するための変数として、年齢、競技年数（ソフトボール、軟式野球、硬式野球を含む）、プロ年数、ポジションについて回答を求めた。

3. データ解析

データに欠損が認められなかった57名を解析対象者（有効回答率100%）とし、競技年数と職務満足感（1因子）、目標志向性（2因子）、競技特性不安（5因子と合計得点）の基本統計量と相関係数を算出した。その後、職務満足感と目標志向性の競技特性不安に対する規定力について検討するために、職務満足感と目標志向性、年齢、競技年数を独立変数、競技特性不安および5つの因子を従属変数とした重回帰分析（6種類）を実施した。以上の統計解析には、IBM SPSS Statistics 21.0を使用した。なお、統計処理後の分析では、有意水準は5%未満とした。

III. 結果

1. 解析対象者の特徴

解析対象者の特徴を Table 1 に示した。平均年齢は  $21.6 \pm 2.9$  歳、平均競技年数は  $13.6 \pm 3.6$  年、平均プロ年数は  $2.6 \pm 1.2$  年であった。ポジションは、内野手 36.8%、投手 31.6%、外野手 21.1%、捕手 10.5% であった。

Table 1. Characteristics of participants (n = 57)

	n	%
ポジション		
内野手	21	36.8%
投手	18	31.6%
外野手	12	21.1%
捕手	6	10.5%
平均年齢 (S.D)	21.6歳 (2.9)	
平均競技年数 (S.D)	13.6年 (3.6)	
平均プロ年数 (S.D)	2.6年 (1.2)	

2. 各変数の基本統計量と相関関係

各変数の平均値と標準偏差、変数間の相関係数を Table 2 表 2 に示した。競技特性不安は、年齢と競技年数との間に弱程度の負の相関、自我志向性との間に弱程度の正の相関が認められた。信頼性係数については、すべての尺度において十分な値が示された（職務満足感： $\alpha = .76$ 、課題志向性： $\alpha = .86$ 、自我志向性： $\alpha = .90$ 、競技特性不安： $\alpha = .90$ 、精神的動揺： $\alpha = .68$ 、勝敗の認知的不安： $\alpha = .67$ 、身体的不安： $\alpha = .67$ 、競技回避傾向： $\alpha = .67$ 、自信喪失： $\alpha = .85$ ）。

Table 2. Descriptive statistics and correlations among the study variables (n = 57)

	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 年齢	21.95	2.88										
2. 競技年数	13.61	3.75	0.61***									
3. 職務満足感	3.72	0.77	-0.23	0.12								
4. 課題志向性	4.42	0.57	-0.09	0.16	0.22							
5. 自我志向性	3.85	0.59	-0.04	0.08	0.10	0.38**						
6. 競技特性不安	1.77	0.42	-0.34*	-0.35**	-0.11	0.23	0.37**					
7. 精神的動揺	1.80	0.46	-0.31*	-0.40**	-0.16	0.17	0.26	0.80***				
8. 勝敗の認知的不安	1.92	0.53	-0.21	-0.06	0.02	0.30*	0.46***	0.68***	0.29*			
9. 身体的不安	1.66	0.54	-0.19	-0.17	-0.02	0.34*	0.32*	0.81***	0.60***	0.45***		
10. 競技回避傾向	1.42	0.40	-0.27*	-0.21	-0.12	0.16	0.31*	0.84***	0.71***	0.46***	0.63***	
11. 自信喪失	2.03	0.69	-0.36**	-0.49***	-0.14	0.02	0.19	0.88***	0.67***	0.49***	0.59***	0.68***

注. 変数3.~5.は5段階、変数6.~11は4段階評定で測定した

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001

3. 職務満足感および目標志向性と競技特性不安の関連

職務満足感と目標志向性が競技特性不安と関連するかどうかを検証するために、競技特性不安を従属変数として重回帰分析を行った (Table 3, Figure 1, 2). その結果、自我志向性が競技特性不安に対して有意な説明力 ( $\beta = .34, p < .01$ ) を有していることが明らかとなった。続いて競技特性不安を構成する5つの因子を従属変数として投入したところ、

第2因子の「勝敗の認知的不安」に対しては、自我志向性が正の回帰を示した ( $\beta = .41, p < .01$ )。続く第3因子の「身体的不安」を従属変数とした分析では、課題志向性が正の回帰を示す結果となった ( $\beta = .30, p < .05$ )。第4因子の「競技回避傾向」に対しては、自我志向性が正の説明力 ( $\beta = .30, p < .05$ ) を示し、第5因子の「自信喪失」には、競技年数が負の説明力 ( $\beta = -.40, p < .01$ ) を有していることが明らかとなった。

Table 3. Multiple regression analysis predicting trait anxiety (n = 57)

	Factor 1 競技特性不安	Factor 2 精神的動揺	Factor 3 勝敗の認知的不安	Factor 4 身体的不安	Factor 5 競技回避傾向	Factor 6 自信喪失
独立変数	( $\beta$ )	( $\beta$ )	( $\beta$ )	( $\beta$ )	( $\beta$ )	( $\beta$ )
年齢						
競技年数						-0.40*
職務満足感						
課題志向性				0.30*		
自我志向性	0.34**		0.41**		0.30*	
$R^2$	0.34**	0.27**	0.28**	0.22*	0.22*	0.31**

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

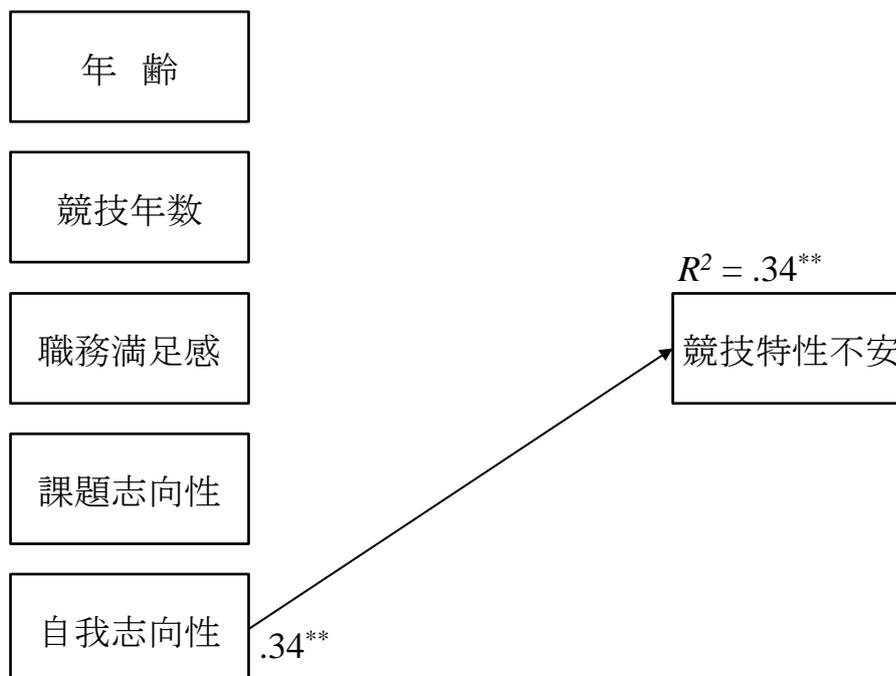


Figure 1. Multiple regression analysis predicting trait anxiety (n = 57)

\*\* $p < .01$

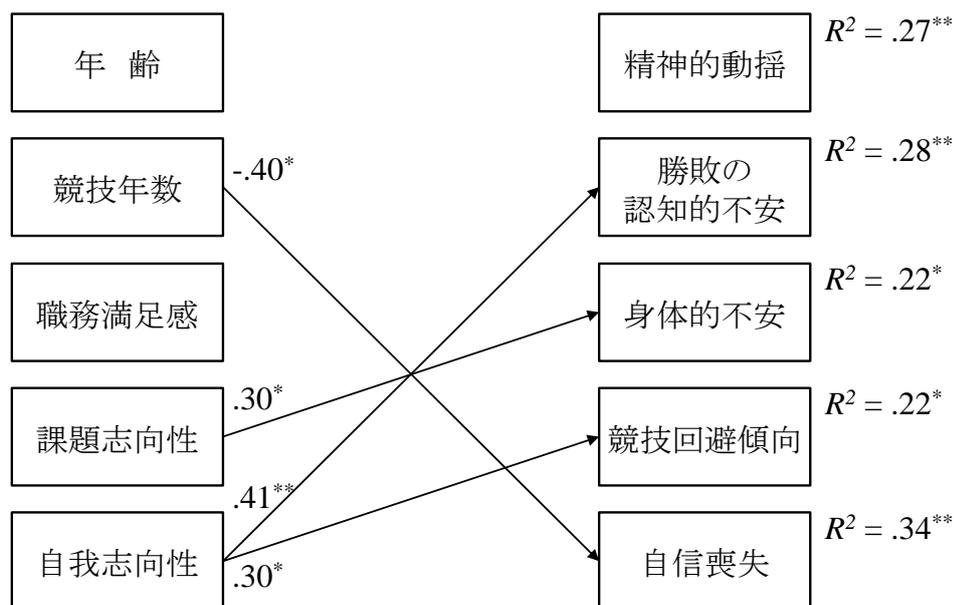


Figure 2. Multiple regression analysis predicting subscales of trait anxiety (n = 57)

\*p < .05, \*\*p < .01

#### IV. 考察

本研究では、プロスポーツ選手の職場環境や就業条件が競技パフォーマンスの低下を引き起こすストレス反応と関連するののかという観点から、選手の職務満足感と競技特性不安の関係性を明らかにした。その過程で選手の競技特性不安に対するチームの経営サイドからのアプローチ（職務満足感）とコーチらの競技サイドからのアプローチ（目標志向性）を比較し、前者の有効性の検討を試みた点が本研究のオリジナリティである。

職務満足感および目標志向性と競技特性不安の関係性を検証するために、競技特性不安を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、職務満足感と競技特性不安の間には有意な関連性は認められなかったが、自我志向性が競技特性不安に対して有意な説明力を有していることが確認された。

職務満足感と競技特性不安についての結果は、女子プロ野球選手の職務満足感の向上が競技特性不安の抑制に寄与する可能性が低いことを示している。競技特性不安の5つの下位因子を従属変数に投入した分析においても同様の結果となった。

産業・組織心理学の領域では、職務満足感を、ストレス反応を規定する要因1つとして位置付け、職務満足感とストレス反応との間に負の相関関係があることが報告されている<sup>2)</sup>。また、我が国の製造業の従業員を対象とした研究<sup>4)</sup>では、キャリアへの満足感や対人関係への満足感、能力発揮への満足感といった個々の職場環境に対する満足感が高まることで、全体的な職務満足感が高まり、それによって精神健康度が向上する可能性が指摘されている。しかしながら、本研究の結果から、女子プロ野球選手の場合は全体的な職務満足感が高まったとしても、競技パフォーマンスに悪影響を及ぼす競技特性不安の抑制にはつながらないと考えられる。

その一方で、自我志向性が競技特性不安に対して有意な説明力を有していることが確認された。この結果は、女子プロ野球選手の競技特性不安は抑制するためには、選手の自我志向性を低下させることが有用である可能性を示唆している。先行研究<sup>17) 18)</sup>においても同様の知見が示されており、我が国の女子プロ野球選手を対象とした本研究に

においても、その知見を支持する結果となった。

加えて、競技特性不安の5つの下位因子を従属変数とした重回帰分析では、自我志向性が「勝敗の認知的不安」と「競技回避傾向」、目標志向性のもう1つの構成要素である課題志向性が「身体的不安」に対して正の規定力を持つことが明らかとなった。自我志向性に関する結果は、「相手に勝ちたい」や「一番になりたい」といった他者との比較を重視する傾向が強まることで、勝敗に相手に対する不安（例えば「負けた時のことが気になる」や「対戦相手の強さが気になる」など）や競技を避ける傾向（例えば「その場を逃げ出したくなることもある」など）が強まることを示唆している。また、課題志向性に関する結果は、「上達したい」や「全力を尽くすことが重要だ」といった目標を重視することで、競技場面における身体的な不安が高まることを意味している。しかしながら、アメリカで子供や大学生の男女を対象とした研究<sup>18) 25)</sup>では、熟達することや学習することを目標にする傾向は、競技不安との間に負の相関関係があることが報告されている。このように、先行研究と異なる結果となったのは、本研究の対象者を日本人の女子プロ野球選手に限定したことが起因していると考えられる。前述したように、日本女子プロ野球リーグは、他の独立リーグに比べて試合数や登録選手数が少なく、選手たちは非常に不安定な状況で職業としての野球を続けている。そのような状況の中では、個人の熟達や学習を重視した目標であったとしてもより良い結果を目指すという志向性が一部の不安につながるのかもしれない。したがって、この結果は当該対象者特有のものである可能性があるため、課題志向性と「身体的不安」の関連性については、性別や人種、年齢、種目、カテゴリの影響を考慮したうえで更なる検討が求められる。

競技年数は、競技特性不安の第5因子「自信喪失」に対して有意な負の回帰を示した。この結果は、競技年数が長くなるにつれて、比較的安定したパーソナリティ特性としての自信を失う傾向が弱まっていくことを示唆している。特に、競技年

数を重ねることが、「自信をなくすことがある」、「失敗やミスのが心配になる」といった自分の能力への不信感から生じる不安を抑えるうえで有用であると考えられる。練習や試合で経験を重ねることによって、自分への自信が高まり、重要な場面において動揺しない心理的なスキルが身に付くのかもしれない。ただし、この知見は横断的調査によって得られたものであり、競技年数を重ねたことで自信を失う傾向が弱まったのではなく、自信を失いにくい選手が競技を続けることができたと解釈することもできる。特に、競技年数には様々な要因が関連していることが予想されるため、今後はそれらの要因を明らかにすると共に、縦断的研究を実施し慎重に議論する必要がある。

さらに、本研究では新興のプロスポーツリーグに所属する選手の職務満足感に関する基礎資料を収集することを副次的な目的とし、職務満足感の記述統計を算出した。その結果、平均値は3.72(±0.77)となったが、国内外でプロスポーツ選手の職務満足感に関する調査がまだ十分になされていないため、この値の高低について言及することは難しい。プロスポーツ選手以外の職種を対象とした研究では、江口ら<sup>26) 27)</sup>が看護師の職務満足への関心が高まっていることに着目し、看護師の職務満足測定尺度を開発している。また、安達<sup>28)</sup>はセールス職者を対象として尺度項目を選定し、給与や人間関係、職務内容に関する満足度などの変数を用いて設定した因果モデルの妥当性を検証した。このように、職務満足を扱った先行研究の中には、ある職種に特化した尺度を用いてその他の変数との関連性について検討した研究も少なくない。今後、プロスポーツ界においても選手の職務満足への関心が高まれば、江口ら<sup>27)</sup>が行ったように、プロスポーツ選手という職種に特化して全体的な職務満足感および具体的・個別的職務についての満足感を測定する尺度の開発が必要となるであろう。

## V. 終わりに：現場への応用と今後の課題

以上のように、本研究では、産業・組織心理学の知見を援用して、プロスポーツ選手の職務満足感と目標志向性が、選手の競技特性不安を抑制するためにどの程度有用なのかという問いについて検討した。その結果、選手の競技特性不安を抑制するためには、選手の自我志向性を低下させることと、競技年数を重ねることが有用であると示唆された。このことから、カウンセラーやメンタルトレーナー、コーチなどの専門家によるスポーツ心理学の知見を活かした効果的なサポートについて検討することの重要性が確認された。加えて、競技年数が「自信喪失」に対して負の説明力を有していたことから、効果的なサポートについて検討する場合には、経験の浅い選手を対象とした研究や支援プログラムに焦点を当てることも必要になるであろう。

一方で、職務満足感と競技特性不安の関連性は認められなかったが、本研究には、プロスポーツ選手の競技不安に対するチームの経営サイドからのアプローチの有用性を検証したという点で意義がある。今後は、性別や種目、選手数などを考慮して対象者を抽出したうえで、企業の人材マネジメントとエリートアスリートのコーチングという2つの観点から、プロスポーツ選手の競技力向上に寄与する要因を明らかにすることが期待される。

## 注 記

1) 目標志向性は、2つ志向性によって構成されている。1つは課題志向性と呼ばれ、個人の内的基準によって目標を設定する傾向である（例えば、「新しい技ができるようになりたい」や「全力を尽くしたい」など）。もう1つは自我志向性と呼ばれ、他者との比較を基準にして目標を設定する傾向である（例えば、「あの選手より速く走りたい」や「この中で一番になりたい」など）。目標志向性と競技不安に関する先行研究<sup>17) 18)</sup>では、前者の課題志向性と競技不安の間に負の関連性があり、後者の自我志向性と競技不安の間には正の関連性があることが確認されている。

## VI. 謝辞

本論文は、阪南大学産業経済研究所助成研究の成果報告である。本研究の資料収集にあたって、ご協力頂いた日本女子プロ野球リーグの皆様にご心よりお礼を申し上げます。

## VII. 参考文献

- 1) 石原豊一；日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けて：野球ビジネスの日米比較から，スポーツ産業学研究，Vol.21, No.1, pp.73-84, 2011.
- 2) McLean, A. A.; Work Stress. Massachusetts: Addison-Wesley, 1979.
- 3) Warr, P., et al.; Scales for the measurement of some work attitude and aspects of psychological well-being, Journal of Occupational Psychology, Vol.52, pp.129-148, 1979.
- 4) 田中美由紀；職務満足感に関する諸要因の検討，早稲田大学心理学年報，Vol.30, No.1, pp.29-36, 1997.
- 5) スモール・スミス編，市村操一ほか監訳；ジュニアスポーツの心理学：第11章，マイケル・パッサーほか，飯田順子訳；ジュニアスポーツにおける子供の不安，大修館書店：東京，pp.73-84, 2008.
- 6) 古賀愛人；状態不安と特性不安の問題，心理学評論，Vol.23, No.3, pp.269-292, 1980.
- 7) Martens, R., & Gill, D. L.; State anxiety among successful and unsuccessful competitors who differ in competitive trait anxiety, Research Quarterly (American Alliance for Health Physical Education & Recreation), Vol.47, pp.698-708, 1976.
- 8) Martens, R., & Simon, J.; Comparison of three predictors of state anxiety when competing, Research Quarterly (American Alliance for Health Physical

- Education & Recreation), Vol.47, pp.381-387, 1976.
- 9) 橋本公雄, 徳永幹雄; 競技不安の尺度作成に関する研究: 特性不安と状態不安の関係について, 日本スポーツ心理学研究, Vol.12, pp.47-50, 1985.
  - 10) 徳永幹雄, 他; 試合前の状態不安と実力発揮度の関係, 健康科学, Vol.13, pp.105-114, 1991.
  - 11) 橋本公雄, 他; スポーツにおける競技特性不安尺度 (TAIS) の信頼性と妥当性, 健康科学, Vol.15, pp.39-49, 1993.
  - 12) 徳永幹雄; 不安をどのように測定するか, 体育の科学, Vol.47, pp.205-210, 1997.
  - 13) 橋本公雄, 徳永幹雄; スポーツ競技におけるパフォーマンスを予測するための分析的枠組みの検討, 健康科学, Vol.22, pp.121-128, 2000.
  - 14) 種ヶ嶋尚志; 競技不安を訴えて来談したスポーツ選手との認知療法によるカウンセリング, スポーツ心理学研究, Vol.37, No.1, pp.13-23, 2010.
  - 15) 高井秀明, 他; 漸進的弛緩法と自律訓練法の継続的練習が競技不安と主観的評価に及ぼす影響, 催眠学研究, Vol.52, No1・2, pp.28-34, 2010.
  - 16) Smith, R.E., et al.; Effects of a motivational climate intervention for coaches on young athletes' sport performance anxiety, Journal of Sport and Exercise Psychology, Vol.29, pp.39-59, 2007.
  - 17) Biddle, S.J.H., et al.; Correlations of achievement goal orientations in physical activity: A systematic review of research, European Journal of Sport Science, Vol.3, pp.1-20, 2003.
  - 18) Smith, R.E., et al.; Measurement of multidimensional sport performance anxiety in children and adults: The Sport Anxiety Scale-2, Journal of Sport and Exercise Psychology, Vol.28, pp.479-501, 2006.
  - 19) Nicholls JG, et al.; Adolescents' theories of education, Journal of Educational Psychology, Vol.77, pp.683-692, 1985.
  - 20) 日本女子プロ野球リーグ; 2010年試合結果一覧, <http://www.jwbl.jp/result/result2010/> (参照日: 2014年11月11日).
  - 21) 日本女子プロ野球リーグ; 2011年試合結果一覧, <http://www.jwbl.jp/result/result2011/> (参照日: 2014年11月11日).
  - 22) 日本女子プロ野球リーグ; 2012年試合結果一覧, <http://www.jwbl.jp/result/result2012/> (参照日: 2014年11月11日).
  - 23) 日本女子プロ野球リーグ; 2013年試合結果一覧, <http://www.jwbl.jp/result/result2013/> (参照日: 2014年11月11日).
  - 24) 伊藤豊彦; スポーツ場面における目標志向性の予備的検討, 体育学研究, Vol.41, pp.261-272, 1996.
  - 25) Vealey, R. S., & Campbell, J. L.; Achievement goals of adolescent figure skaters: Impact on self-confidence, anxiety, and performance, Journal of Adolescent Research, Vol.3, No.2, pp.227-243, 1988.
  - 26) 江口圭一, 他; 看護師の職務満足測定尺度の開発に向けた予備的研究, 立教 DBA ジャーナル, Vol.3, pp.3-14, 2013.
  - 27) 江口圭一, 他; 看護師の職務満足測定尺度の開発, 広島大学マネジメント研究, Vol.15, pp.65-76, 2014.
  - 28) 安達智子; セールス職者の職務満足感: 共分散構造分析を用いた因果モデルの検討, 心理学研究, Vol.69, No.3, pp. 223-228, 1998.

Abstract

**Job satisfaction and goal orientations as predictors of trait anxiety in Japanese female professional baseball**

This study aimed to examine the relationship between job satisfaction, goal orientation and trait anxiety among Japanese female professional baseball players. Fifty-seven players completed a questionnaire survey in February and March 2013. The research items included 1) job satisfaction, 2) trait anxiety, 3) goal orientation, back ground information (e.g., age, years of baseball experience and position). Multiple regression analyses were used to examine the relationship between job satisfaction and trait anxiety. Job satisfaction, achievement goals, age and years of baseball experience were entered into the analyses as independent variables. In addition, trait anxiety and its five subscales entered into the each analysis as dependent variable. The results showed that job satisfaction wasn't a significant predictor of trait anxiety. However, ego orientation and years of baseball experience related to trait anxiety. These results indicate that controlling player's ego orientation might decrease their trait anxiety, but increasing their job satisfaction can't decrease it.

Key words: Working Conditions, Competitive Anxiety, Achievement goals,  
Female Professional Baseball